Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
1 － 6　（2018）

秋田大学イングリッシュマラソン

教育推進総合センター[1]　国際資源学部[2]
濱田 陽・ベセット アラン・グラフストロム ベン・タッカー ジェイソン

The English Marathon Program in Akita University

Yo Hamada[1], Alan Besstte[2], Ben Grafström[1], and Jason Tacker[2]

概要　秋田大学では，平成 29 年度より，学生の英語力向上促進のために，イングリッシュマラソンという新プログラムを開始した。参加者は，全学部から公募し，選考を経た上，年間を通じて様々な英語行事に参加し，同時に，日常の英語学習も継続して「走り」続けることで，総合的な英語力の育成を目指した。本論文では，イングリッシュマラソンの目的・内容・参加者の様子・成果・今後の課題について報告する。

1．はじめに

本学では，学生の英語力向上を目的とし，教養を担当する教育推進総合センターに「The ALL ROOMs」（濱田，2013; Grafström，2014; Grafström 2015）を設置し，学生にオールイングリッシュ環境の提供と，自律学習を促進する，学習サポートの体制を整えている。また，TOEIC 特別講座やイングリッシュキャンプも毎年開講し，学生の動機を高め，英語をより身近に感じられるような活動を展開している。そこで，それらの活動を有機的に結びつけ，より多くの学生の英語力を育成するために，イングリッシュマラソンの着想に至った。

2．目的

イングリッシュマラソンには複数の目的があり，最も重要な目的は，学生の本質的な英語力を着実に育成できるプログラムの構築と提供である。それに付随して，まず，ALL ROOMs を中心とした，教育推進総合センター主催の様々な英語活動を統合し有機的に結びつけ，目に見える形でのプログラムを作るという目的がある。そして，偏った英語力ではなく，英語スキルに加え英語を学ぶ姿勢や英語に対する態度を育成する。また，広く公募をして様々な分野の学生を参加させる中で，互いに切磋琢磨して英語力の育成を促進する。これらの過程で，イングリッシュマラソンに参加した学生が，各学部の中で，積極的に英語を学ぶ姿勢・優れた英語力を持った中心的存在になってほしいという願いも込められている。つまり，個々の学生の英語力の伸長を図る中で，その効果が広がるという積極的な波及効果も狙っている。

また，国際資源学部では，３年次に海外資源フィールドワークという，必修科目があり，海外で，資源に関する最新の状況を調査し，学ぶ独自のプログラムを組んでいる。必然的に，英語力や海外で生活する精神的強さやタフさが必要とされる。イングリッシュマラソンでも海外資源フィールドワークの準備としての基礎力を育成することも狙っている。

3．位置づけと体制

本年度は，初年度ということもあり，単位の付与はしない。ただ，国際資源学部においては，専門教育をすべて英語で行うという学部の教育の特性を踏まえて，「準正課教育」として位置づけた。準正課教育とは，卒業要件には含まれないが，本学の教育戦略と意図に基づいて，教職員が関与・

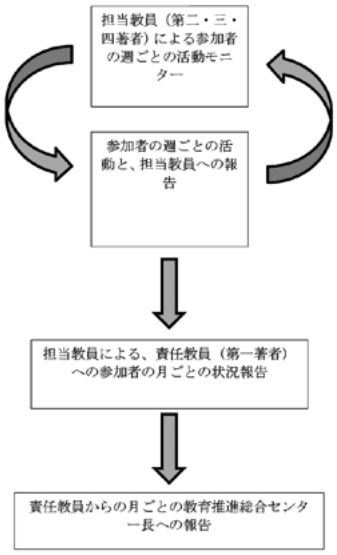
支援する授業外の学習活動である。主催は，教育推進総合センターであり，センター長の統率のもと，オフィシャルに各学部・事務的関連部署に協力依頼を要請し，イングリッシュマラソン自体は，全学の活動と位置づけた。

具体的には，実施責任者である第一著者が，第三著者である教育推進総合センター専任教員1名・第二・四著者の国際資源学部の専任教員2名と協力して，学生の教育を行った。なお，第二・三・四著者は北米出身の英語母語話者である。各教員が約10名の学生を担当し，月ごとに学習観察・評価を行い，それを第一著者が取りまとめ，センター長に随時報告し，指導・助言を仰ぎながら進める形をとった（Figure 1 参照）。

実施責任者の役割は，運営の統括と，事務的仕事，各部署との連携，海外短期留学先との交渉，TOEIC 講座の運営等，いわゆる「何でも屋」である。

Figure 1

イングリッシュマラソン　フローチャート



４．プログラム内容

４－１．開始について

まず，2017 年の 1 月に参加者の公募を行った。選考は，国際資源学部は独自に，その他学部の希望者は教育推進総合センターで一括した。ここ数年本学では 2 月に ALL ROOMs イングリッシュキャンプを開催しており，2017 年度は，イングリッシュマラソン参加希望者だけでなく，一般学生の参加を含める中で，イングリッシュマラソンの選考も兼ねて行った。イングリッシュキャンプには，イングリッシュキャンプ参加者を含むおよそ 40 名の学生が参加し，その中でのパフォーマンスと TOEIC の点数，また普段からの ALL ROOMs でのパフォーマンス等を総合的に判断し，選考を行い，11 名を選出した。倍率はおよそ 2 倍程度であった。国際資源学部は学生の多くが日程的にイングリッシュキャンプに参加できなかったため，独自に，第二著者が面接を行い，総合的に判断し，19 名を選出した。

2017 年 4 月に，決起集会の意味合いを兼ね，最初のオリエンテーションを，担当教員 4 名・参加者 30 名で行った。12 月まで「走り続ける」ことへの心構え・ 9 月に短期留学をすることについての準備・己の英語力を磨く機会であることの確認・大学が後援しているプログラムであることについての確認などを行い，スタートした。

なお，本プログラムは海外研修も含むため，安易なリタイヤを防止し，真摯な態度で向き合うことを宣誓させる意味も込めて，学生には宣誓書への同意を，親権者の同意も得た上で，義務づけた。

４－２．ALL ROOMs とは

ALL ROOMs とは，2010 年度から本学の教育推進総合センターに設置されている，語学自律学習施設である。ALL ROOMs 内は英語が公用語となっていて，学生であれば誰でも利用はでき，英会話・自主学習がメイン，さらに定期的にハロウィーンなどのイベントも開催される。 7 名程度の日本人学生スタッフと 3 名程度の留学生学生スタッフを雇っており，彼らと担当教員 2 名（第一著者・第三著者）がチームとなり運営している。日本人学生スタッフは， 2 年生で TOEIC730 点が最低条件として課せられ，卒業までには 860 点が課せられる。過去に 730 点を越えなかったスタッフは皆無で，多くが 900 点以上を取得して卒業していく。現在までの TOEIC の最高得点は 970 点で，留学経験のないスタッフであることからも，英語を日常的に使用することと，自律学習がいかに重要で効果的であるかが分かるであろう。

４－３．英語力向上プランについて

イングリッシュマラソンでは，英語力向上プランとして，「日々の努力による英語力向上」「海

外短期研修による集中的な英語力・姿勢の向上」「TOEIC のためのスキルとしての英語力向上」の３本柱を立てた。加えて，国際資源学部の参加者にはさらなる課題も与えた。

まず，日々の努力による英語力向上プランとしては，週三回 ALL ROOMs を訪れ，各自のニーズに合った英語学習をする。基礎的英会話力が必要な参加者は，イングリッシュラウンジを利用し，ALL ROOMs の学生スタッフや他の学生と英語のみで会話をすることで，英会話力を磨く。リスニング力が必要な学生は，個別の部屋で，DVD 教材等を使用し，トレーニングを行う等様々な方法で，週三回利用することを求めた。また，多読を課した。多読とは，あらかじめレベル別に必要な語彙により構成された英語の本を大量に読むことを指し，リーディング力や語彙力を無理なく伸ばす方法とされている。各学習者のレベルにあった本を読む事（およそ 95％以上の語彙が分かる内容）も重要で，夏休み前までに最低でも 40000 語を読むことを課した。

参加者の多読の促進と，状況を管理するために，第二著者が以下のような内容で，システムを構築した。

１）MReader アカウントを参加者全員に配布。
２）参加者はALL ROOMsや図書館で多読を行う。
３）その後，MReader のウェブ上で，読んだ本に関するテストを受ける。
４）テストに合格した場合は，読んだ語数がカウントされ，不合格の場合は，再テストはなく，語数はカウントされない。別の本を読んでそのテストを受けなければならない。
５）第二・三・四著者が毎週進行状況をチェックして，設定した目標に向かっていることを確認した。特に，第三著者は，自分のグループ内で最も多く読んだ参加者を随時表彰するなど工夫をし，学生の動機の継続を促進した。

なお，MReader に関しては，以下のサイトに詳細が載っている。
https://mreader.org/mreaderadmin/s/html/about.html

海外短期研修による集中的な英語力・姿勢の向上として，26 名はマレーシアのマラヤ大学へ２週間，４名はカナダのビクトリア大学へ４週間９月に行くプログラムを組んだ。カナダのビクトリア大学は，本学の協定校であり，以前から本学一般の学生の短期留学先となっていた。４週間，現地にてレベル別の語学研修を受けるだけでなく，ホストファミリー宅に滞在し，週末には小旅行のような経験もすることができ，毎年好評のプログラムである。マラヤ大学も本学の協定校であるが，今回はイングリッシュマラソンのために新たなプログラムを組んでいただいた。26 名が一クラスで本学用に組んだプログラムで授業を受け，滞在先は，現地手配の寮，そしてビクトリア同様に，週末は小旅行等も経験できる。

TOEIC のためのスキルとしての英語力向上については，2010 年度より，TOEIC 専門の外部講師を招聘して開催していた TOEIC 講座に乗り入れる形に加え，イングリッシュマラソン参加者には，よりきめ細かい指導を行う事とした。具体的には，10 月と 11 月の最終土曜に終日 TOEIC 講座を設定し，夏休みから 10 月にかけては指定単語帳「TOEIC TEST 英単語出るとこだけ！」（小石，2016）を入念に習得する事を求めた。夏休み明けのオリエンテーションで，単語テストを行い，各班で合格ができない人が一人でもいた場合は，翌週班全員が再試験というルールを決め，各グループで「学びあう」学修を試みた。10 月最終土曜には１回目の講座があり，主に Parts １，２，３，４についての学習の仕方や，ポイント，戦術などを学び，講師に２回目までの宿題を課していただいた。その宿題については，第一著者が，参加者全員を２週間に一度集め，小テストを行うことで，進捗状況を確認した。単語習得と同様に，班ごとの小テストとし，「脱落者を出さない」工夫の一つとした。11 月の二回目の講座では，残りの Parts や実際の試験に関する講義・演習をして頂き，参加者は，数日後に行われる本番の TOEIC に備えた。

国際資源学部の参加者は，上記のプログラムに加え，前期にはネット上での international exchange activity を行った。第二著者の管理の元，ネット上で他国の人々とコミュニティを作り，自分の考えを英語で書いて意見討論するものである。後期には，WordEngine を使い，語彙学習を行った。およそ 80 分程度かかる課題で，毎週 400 正答することを求められた。これらの活動に関しては，Google Form に記入し，学習過程を記録した。

４－４．学生の学修チェックについて

開始にあたり，参加者の学習状況のチェックのためのシステムの構築が必要であったため，ウェブシステムに長ける第三著者が，以下のように構築した。参加者の ALL ROOMs の訪問数をオンライン上で管理するために，QR コードを作成し，それを Google Forms で管理する方法である。

１）参加者が AL L ROOMs を訪れる。
２）ALL ROOMs でスキャンできるよう予めプリントアウトした QR コードを各自がスマートフォンでスキャンし，その情報は Google Form により自動的に収集され，日時が記録される。
３）また，Google Form に，マラソン関連の学習活動と ALL ROOMs での活動を各自が記録する。
４）第二・三・四著者が毎月まとめて，第一著者へ送ったものを第一著者が集計する。

４－５．海外研修の安全確認について

30 名を海外に送り出すために，想定できる限りの対策を行った。まず，８月のオリエンテーションでは，第三著者が，海外での生活に関する注意点を細かく参加者に向けて講話した。参加者の中の「常識」の中には含まれない注意点が多々あり，真剣に聞いていた。また，研修期間中は，成田空港に集合時（行き），現地到着時，月曜朝，現地空港到着時（帰り），成田空港到着時にグループリーダーがグループ全員の写真を facebook の専用ページにアップすることで安否確認をし，緊急用に，マラヤ組には２台，カナダ組には１台の携帯電話を持たせた。また，何か気になる点などがある場合は，第一著者へ直接メッセージを送る体制も整えた。

５．参加者とグループについて

参加者は，前年度末に学内に公募し，最終的に，１年生 26 名（今年度の２年生）と２年生４名（今年度の３年生），内訳は国際資源学部 19 名と理工学部５名，教育文化学部６名の計 30 名を選考した。30 名を基本５名のグループに分け，国際資源学部が４グループ（マラヤ大学グループ３，ビクトリア大学１），教育文化学部がマラヤ大学１グループ，理工学部がマラヤ大学１グループとなった。３年生が３名，他 27 名は２年生であった。担当教員からのやり取りとグループ全体の管理を目的とし，グループ毎にグループリーダーを任命した。参加者へのアドバイザーとして，前述の国際資源学部所属の第二・第四著者が，２グループずつを担当し，教育推進総合センターの第三著者が，理工学部と教育文化学部の２グループを担当した。毎月末に，前述の Google Form を利用して担当教員に学習状況を報告し，担当教員が評価し，適宜指導助言を与えるという仕組みをとった。

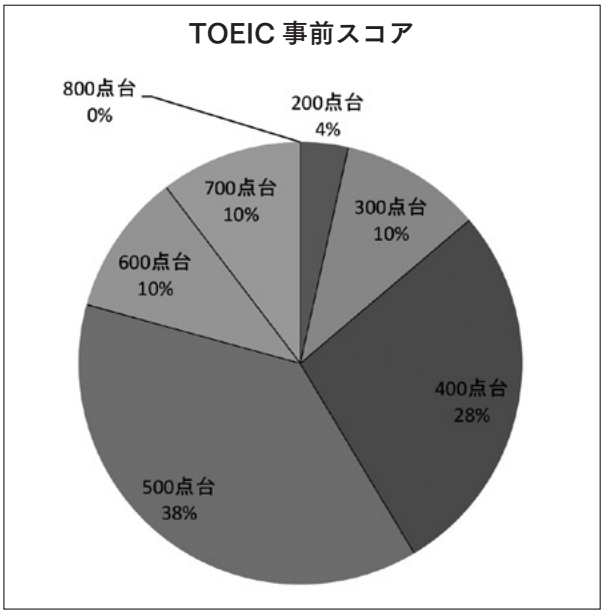
なお，マラソンを運営するために工夫した点は，数字や目には見えない雰囲気を大切にするという点である。現在，多くの高校では，学校側が生徒に課題を与え，生徒がこなす形を採用している。つまり，既存のレールに乗って生徒は走ってきている。大学教育では，自己責任のもと，自主性が重んじられるが，その折衷案のスタンスを採用した。具体的には，TOEIC 特別講座に向けて，単語テストを課したが，毎週小テストを行うことで，参加者が高校までに経験してきた流れと近い形を作り，ある程度のリズムを作ることを心掛けた。その一方で，こちらからの命令や強制ではなく，TOEIC の必要性・担当教員がどのように考えてマラソンを運営しているかを場面に応じて説明していくことで，学生の内面から動機が高まるようにも工夫した。たとえば，「皆さんの英語力が上がるのであれば，私が敵になってもよい。厳しい課題を課すのは，そういう思いからです」という内容の発言は繰り返した。また，ALL ROOMs には頻繁に顔を出すように心がけ，参加者との日々のコミュニケーションを大切にすることを心がけた。

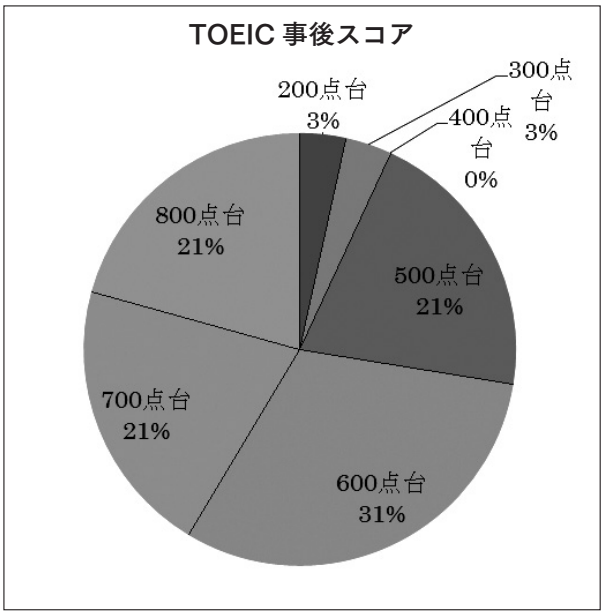
６．成果について

成果については，TOEIC による客観的評価と，著者の観察による評価について記述する。

初めに，TOEIC を指標として導入した理由を述べる。英語力を筆記試験で測ることへの賛否両論はあるが，客観的成果を示すためには，受験者が時間的・精神的・金銭的に負担が大きくない事が一つの要素となる。確かに，TOEIC の点数が英語力をそのまま反映するとは言い難い一方，高い英語力を備えていれば，TOEIC の点数にある程度反映されることも事実である。また，参加者は，英

語のコミュニケーション能力の向上を希望する一方，就職活動の際にも，客観的な英語力指標が必要であり，常に学生からのニーズが高い TOEIC を用いる事とした。





TOEIC の実際の点数の推移について考察したい。初めに，マラソン開始前のスコアである。平均点は，537 点であり，高くも低くもない中間的な層と言える。「事前 TOEIC スコア」が示すように，500 点台が 1/3 以上を占めており，400 点台を合わせると約 2/3 となる。実際，開始時の英語の会話力は，決して高くなく，ALL ROOMs においての英語のみの環境では，聞いている内容を理解することも十分に理解できない参加者も少なくなく，他の ALL ROOMs ユーザーに圧倒されて自分の言いたいことを言えない参加者も多かった。

イングリッシュマラソン後の平均点は，662 点であり，約 125 点の得点向上が見られる。全体として見ても，2/3 を占めていた 400 点台，500 点台の層が，上位に移動し，600 点台と 700 点台が半数を占めた。500 点台を合わせると約 3/4 が 500 点台から 700 点台を占めている。さらに，マラソン前は皆無であった 800 点台が 6 名も存在している。最高の伸びを記録したのは，585 点から 885 点の 300 点であり，次に 480 点から 750 点の 270 点である。

イングリッシュマラソン後の客観的なスコアアップに加え，観察的評価を述べる。イングリッシュマラソンを通して，参加者が変わったと思われるのは，英語に対する姿勢・英語力・グループダイナミックスの三つである。まず，英語に対する姿勢が変わったことを顕著に表すのは，TOEIC 試験前の参加者の様子である。一様に，そわそわし，中には相当な緊張をしている者も見られた。「今までこんなに英語を勉強して受験したことがないので，緊張しています」という参加者の言葉に代表されるように，自身と真摯に向き合い英語を学習したためある程度結果を恐れたり不安に思ったりする心境に陥った模様である。しかし，これは教師の側からは，大きな成長だと思えた。そして，結果を手にした大半の参加者は，客観的には伸長したスコアにも悔しがり，「もっと勉強しよう」「次はリベンジをしたい」という発言をし，積極的な悔しがり方が見られた。

また，イングリッシュマラソンを通して，英語でコミュニケーションをとることに関しての変化も見られた。特に海外研修を終えてから顕著に見られたが，春先は英語で話す事をためらっていた参加者が，十分とは言えない英語力の中でも，なんとか相手に伝えよう，そして理解しようとする姿勢が見られた。これは数字では測ることはできず，感覚として伝わってきたものであるが，確かな事であると思う。

グループダイナミックスにも変化が見られた。特に海外研修前には参加者の一体感は見られず，ただの「参加者の集まり」であったが，研修後の参加者の様子は「同じ境遇を経験した仲間」のような雰囲気が見られた。さらに，TOEIC 対策講座

の期間も，定期的に班単位での単語テストや小課題をこなしていく必要があったため，グループの連帯感も見られた。

TOEIC 以外の英語力に関しては，こちらも海外研修後に顕著に見られた。日常的に英語を使用したことと，ある程度の自信がついたためか，夏前よりも英語の産出量とスピードが上がっていたように思えた。マラソン開始直後と比較すると，著者の発話に対する理解力も向上していたことは，明らかであった。

7．今後の課題

今回は，第一回目の試みで，基本線は決定していた一方，多くの事が手さぐり状態で，その場その場の最善を尽くす形で運営側も走りきった。そこで，第一回を振り返り，今後に向けての課題とその策を考えたい。

まず，一番の課題は，新規参加学生の英語力の向上の継続である。つまり，今回の参加者は英語力が非常に向上したが，この向上を今後も安定して示していくようにする必要があるということである。そのためには，選考時での一定の英語力を求める事・伸びしろのある参加者を採用することが必要となる。また，プログラムに関しては，コアの部分を決めつつ，状況に応じて対応できる幅を常に持ちつつ，今後も大学と各学部の協力を継続して頂く体制を維持していくことが必要である。

二番目の課題は，イングリッシュマラソンで組んでいる各メニューの有機的な結びつけと，それを参加者への可視化することである。一つのメニューが次のメニューとどういう結びつきで，最終的にどの方向を目指しているかを，参加者と共有して共通の方向性で走っていくことが望まれる。たとえば，前期には ALL ROOMs に週三回通うことになっているが，それは，夏の海外研修に行った際に，既に身に付けた基礎的英語発信力を土台として，語彙習得やリスニング力等，応用力を身に付けるためである，ということを，マラソン開始時, そして随時説明して「選手」と「監督」が二院三脚で走っていくことである。

三つ目は，イングリッシュマラソン後の参加者の行方である。１年プログラムのマラソンが終了すると，参加者は具体的課題をこなす義務がなくなり，自由になる。その結果，本質的な自律学習に向かうのが理想であるが，ある程度の道しるべを与えないと，その域まで達さない懸念もある。その対策としては，既にイングリッシュマラソン用の Facebook のコミュニティを作成して，海外研修時に利用していたため，この SNS を活性化させる案が一つある。また，ALL ROOMs 学生スタッフにも，多くのイングリッシュマラソン参加者がいるため，作ったコミュニティの輪を継続し，今年度の参加者も ALL ROOMs を引き続き利用して輪を広げていけるようにいきたい。

8．まとめ

概して，第一回イングリッシュマラソンは成功だったと思われる。正直手さぐりの中でのマラソンで，走りきった学生には，よく頑張ったと，改めて言いたい。そして，本プラグラムの企画構想段階から幾度となく協議・検討をしてくださった，教育推進総合センター長，全面的な支援を確約し，バックアップしてくださった本学学長には，最大の感謝の意を示したい。そして，国際資源学部の支援をしてくださった国際資源学部長，選考や広報に尽力してくださった国際資源学部副学部長，煩雑な事務作業を引き受けてくださった総合学務課長・新旧総括主査の協力なしでは，このプログラムは成立しなかった。他，本プログラムを支えて下さった他すべての皆様にも感謝の意を示したい。本事業を通して，志の高い様々な学生と直接向き合うことができ，微力ながら，完走するための伴走をすることができたのは，やりがいがあった。この先，少しでも，この経験が 30 名の参加者の中で生きていくことを願っている。

引用・参考文献

小石裕子（2016）TOEIC TEST 英単語　でるとこだけ！アルク

濱田陽（2013）The ALL Rooms の現在と未来『秋田大学教養基礎教育研究年報』15，11 － 19

Grafström, Ben.（2014）. Fostering learner autonomy at Akita University: English Programs that Supplement Course Offerings.『秋田大学教養基礎教育研究年報』. 第 16 号，19-26.

Grafström, Ben（2015）. Cultivating Learner Autonomy within Groups.『秋田大学教養基礎教育研究年報』. 第 17 号，23-31.